

歌曲「君が代」は

一月九日新潟県教育研究協議会主催「民教研」集会の米沢純夫（音楽教育の会全国委員長）さんの講演は、参会者を交えての歌唱から始まるユニークなものでした。以下講演の概要です。

指導要領についていえば、官報で「告示」という。「告示」はお上が下々に告げるという意味だ。未だに「告示」なるものが通用している。

そのこと自体が問題視されなければならぬ。指導主事に問いたただいたら「お知らせです」といっていた。

にもかかわらず現実には憲法以上の重圧になっている。

国旗・国歌を法制化しても「子どもに強制するものではない」といながらも、教師は国家の教育目的を子どもに伝える媒介だ……として教師に対する実質的な行政指導がすすめられているだろう。

「君が代」の歌曲としての問題点

中曽根元首相が旧ユーゴスラビアを公式訪問し儀仗兵を閲兵したとき、ユーゴ軍楽隊の「君が代」演奏のテンポが異常に速かったため、中曽根氏が小走りに歩いてしまったという話を聞いて思わず笑ったことがある。私たちは「君が代」は4拍子で一分間に六〇のゆっくりしたテンポだという先入観がある。しかし、4分音符と2分音符が並ぶあの楽譜は2分の2拍子と読み取れるのがヨーロッパ感覚で普通なのである。したがって曲のテンポは一二〇、行進曲の速さになってしまう。この曲の一つの弱点である。

日本語の特徴として音楽にした場合、等拍、一文字一音符になる傾向があり（ヨーロッパでは一音符、一シラブルが普通）、単調になりやすい。民謡ではそこを、伸ばしたり縮めたりしてリズムを変化させている。民衆が日本語で自分を表現していく中で創り出した手法なのだが、「君

が代」はそうした伝統的リズム法や旋律法を無視して作られたのでリズム全体がベタツとした感じになっている。音階の上でも「君が代」は大きな弱点をもっている。

中学校が荒れだすのは音楽の時間からだという。すぐれた音楽には「自由」が刻みこまれている。「自由」がずたずたに切り刻まれている音楽教科書だけを使う限り、自由の空間の創造は困難である。ベートンベンやモーツァルトなどの音楽家の「自由に生きるって人間にとって本質的に大事なことだ。私はそのために音楽を創る」というメッセージが聞こえてくる。（文責・片岡弘）

